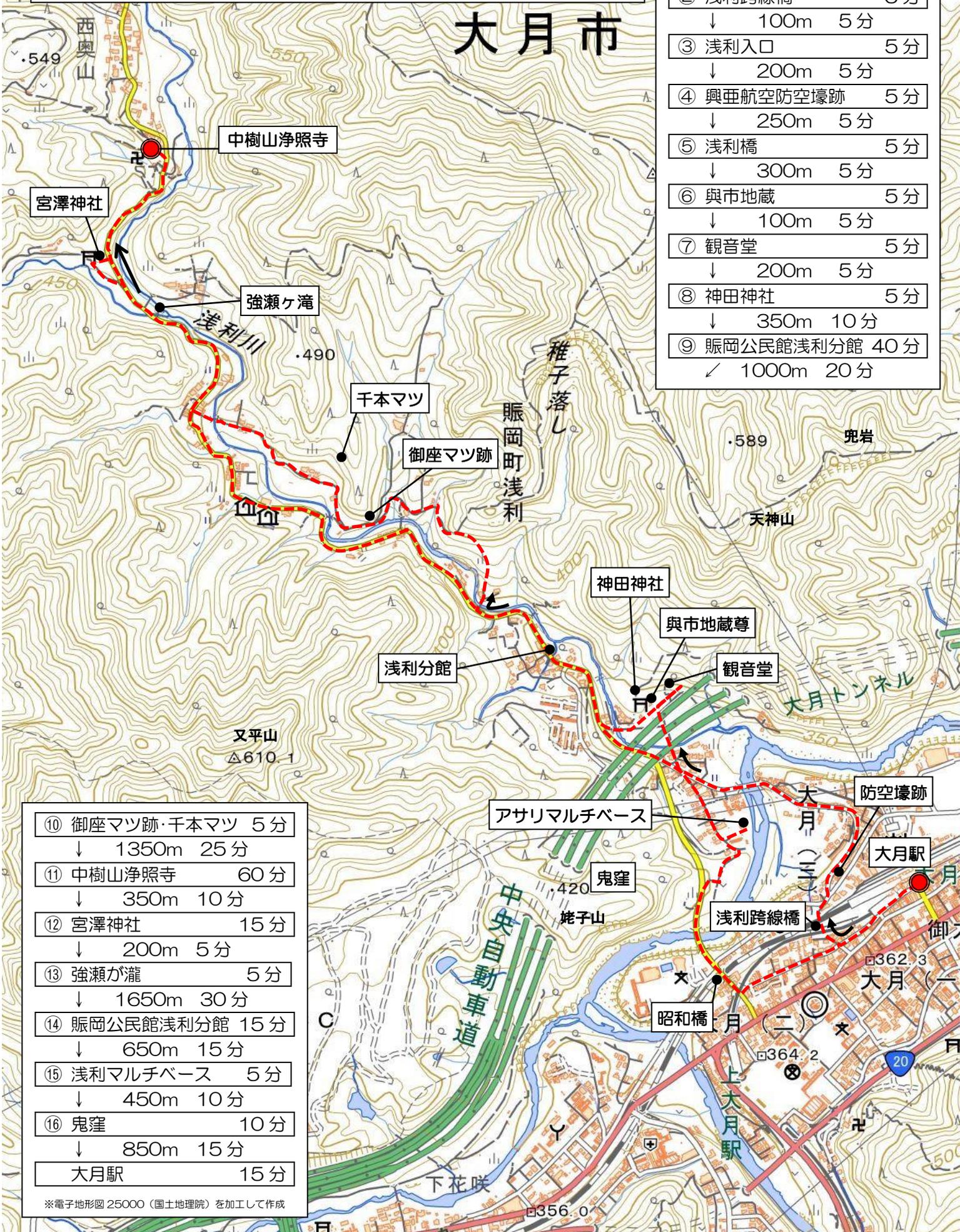


秋の浅利と浅利に伝わる伝説の地を巡る

大月市

コースタイム

① 大月駅	10分
↓ 300m	5分
② 浅利跨線橋	5分
↓ 100m	5分
③ 浅利入口	5分
↓ 200m	5分
④ 興亜航空防空壕跡	5分
↓ 250m	5分
⑤ 浅利橋	5分
↓ 300m	5分
⑥ 與市地藏	5分
↓ 100m	5分
⑦ 観音堂	5分
↓ 200m	5分
⑧ 神田神社	5分
↓ 350m	10分
⑨ 賑岡公民館浅利分館	40分
✓ 1000m	20分



⑩ 御座マツ跡・千本マツ	5分
↓ 1350m	25分
⑪ 中樹山浄照寺	60分
↓ 350m	10分
⑫ 宮澤神社	15分
↓ 200m	5分
⑬ 強瀬が瀧	5分
↓ 1650m	30分
⑭ 賑岡公民館浅利分館	15分
↓ 650m	15分
⑮ 浅利マルチベース	5分
↓ 450m	10分
⑯ 鬼窪	10分
↓ 850m	15分
大月駅	15分

※電子地形図 25000 (国土地理院) を加工して作成

はじめに

江戸時代後期の地誌『甲斐国志』(文化 11(1814)年)【村里部】に、浅利村について「此村は相伝えて浅利式部と云者の領地なりしと云又浅利與市の采地なりしとも云」との記述があります。浅利式部については、名が記されていないために特定することができませんが、浅利與市については、壇ノ浦の戦い(元暦 2(1185)年)で遠矢で名を揚げたことが同書の【人物部】で紹介されていることから、「源氏の三与一」のひとり浅利与一(与一は通称、名は義遠、義成とも)だということがわかります。

浅利氏両人の領地(=采地)があったというこの記述と、浅利式部を与一の嫡男浅利太郎(知義)とみなして、様々なストーリーが生み出されています。

與市地蔵

浅利ヒナタ地区には、市内随一の大きさを誇る高さ 2m あまりの石造りの地蔵が立っています。

地域の人たちから「與市地蔵」とよばれ祀られているこの地蔵のいわれが書かれた文献のうち最も古いものは天明 3(1783)年に出版



された①『甲斐名勝志』で、「浅利與市義遠住し所とて有。俗説に、與市鎌倉より負来れる石地蔵とて長七尺許有、與市地蔵と云」という記述があります。

次いで、前出の②『甲斐国志』【古蹟部】にも、「〔浅利村〕土人相伝ふ浅利式部と云人の居址なりとぞ古き石地蔵畑中に立てり長六尺余足より頭まで石を重ぬること七段なり是蓋し遠方より運来の便なるか為なるべし浅利氏古鎌倉より負来りしと云何れか是なるをしらす」との記載が見られます。

また、大正 14(1925)年に出版された③『北都留郡誌』には、「浅利與一地蔵 昔時鎌倉より送り越されしものにして七壇半より成り高六尺余、石質は伊豆産なり。(中略)此地蔵享和三亥年土砂崩壊の為め埋没し僅かに一二段を存するのみなりしが、明治二十年、村民協力して再建を企て現存せり」とあります。

文面が少しずつ異なるため、誰が、どのような経緯で地蔵を設置したのかを断定することができないばかりか、地蔵そのものについても、高さが①は 7 尺、②・③は 6 尺と違うだけでなく、地蔵の構造的な特徴を示す「段重ね」についても、①にはその記述は無く、②と③でも「七段」「七壇半」と微妙な違いが見られます。

これらの「違い」は、地蔵の立つ地形と、③の享和 3(1803)年の「土砂崩壊のため埋没」、現地蔵の傍らに立つ再建碑の安政 6(1859)年の「流出」という文言を結びつけて考えるに、造立されてから裏山の崩壊によりいくたびか土石流にのみ込まれ、壊れたり流されたりして、そのたびに修復・再建がくりかえされてきたからだと思われます。

いずれにしても、現在の地蔵は明治 29(1996)年に再建されたものであるため、①・②に書かれている地蔵や、あるいはそれ以前にあったかもしれない地蔵の姿かたちや構造、造立の手がかりとなる銘文については知ることができません。

「與市源義遠之霊」と背中に刻まれた現在の地蔵は、現地の説明板にあるように「元暦二年(一一八五)の源平合戦最後の戦場となった壇ノ浦の戦いで遠矢の誉れを得た浅利与一公の生前の貢献に対し鎌倉から送られてきたもの」という伝説に「土砂災害から身代わりになって助けてくださった地蔵」としての畏敬の念が加わり、今後語り継がれていくのだと思います。

浅利観音堂

庶民の間に観音巡礼の信仰が盛んになった江戸時代、郡内でも「郡内三十三観音霊場巡礼」が行われました。二通りのコースが設けられ、浅利観音堂は桂久寺(富士河口湖町)を 1 番とするコースの 15 番目に置かれていました。

創建のいわれについては二説あります。一つは、『郡誌』に書かれている、「曾我兄弟の仇討ち」で曾我兄弟に討たれた工藤祐経の残党を討滅した浅利式部が「元久元年に三月十一日此地に一祠を営み浅利村と改めたり」(元久元年は 1204 年)という説です。もう一つは、観音堂を長く管理していた飯島家に残る昭和 12 年の記録に書かれている、二代将軍頼家の子八幡の替玉として亡くなった與市と妻板額との子市若丸の菩提を弔うために堂宇を建立し観世音菩薩を安置したのが起源であるとの説です。

その後の経緯については、「それから約四百年後の天

正十年（一五八三）武田家が滅んだ際に、三増峠の戦いで戦死した浅利信種公の嫡子、浅利昌種（彦次郎）が徳川家康の家臣、本多忠勝の家来となって浅利を離れて以来、浅利観音堂は完全に村持ちになったと伝わっています」と、当地の説明板に書かれています。

神田神社



『国志』に浅利の産神とある「御嶽権現」のいわれについて、大正 4（1915）年に社掌・氏子惣代らにより書かれた「鎮守御嶽権現、神田大明神之履歴」には、承久元（1219）年に浅利式部により建立され、その後南北朝時代の応永 3（1396）年に神田明神を勧請・合祀したとあり、その後、3 回にわたる土砂崩落の被害にあったため、明治 25（1894）年に現在地に遷座・再建されたと書かれています。

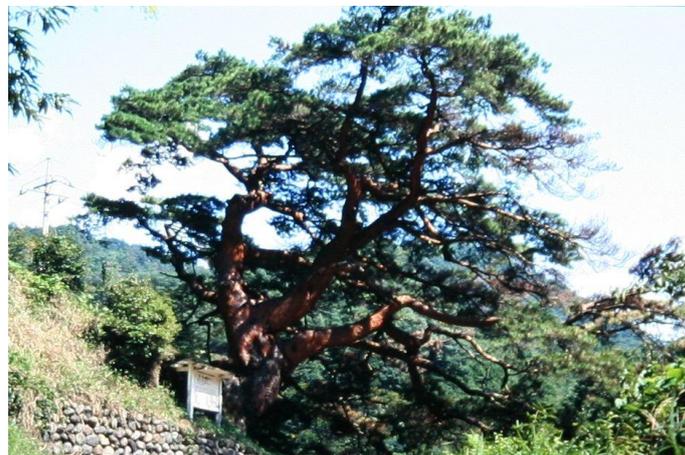
しかしながら、同書には「同社に対する古書類並に神宝等過去幾多の災厄に罹り深き沿革の緒を求むるに由なく」と、前述した同社の起源が口承であることの但し書きもあります。

なお、御嶽権現から、『郡誌』に浅利の村社として記載されている「神田明神」への社名変更？については、明治 25 年の再建の際に行われたと考えられています。

神田神社の祭神は、大己貴命（おおなむちのみこと）、少彦名命（すくなひこなのみこと）、素盞鳴命（すさのおのみこと）の 3 神です。また、御嶽神社は、修験道の本尊蔵王権現を祭った神社で、蔵王権現は神道では大己貴命、少彦名命と習合します。両社とも祭神が一致することから合祀、社名変更も容易に行われたのではないかと推測されます。

御座マツ

樹種はアカマツで、千本松のある尾根の南端の旧道



沿いに立っていました。

樹高は約 8m、斜面上に立っていたため、上地と下地の高さの差が 1.6m もあり、上地から 60cm の高さの幹囲は 4.18m でした。その上で 4 支幹に分岐し、一番太い支幹の分岐部の周囲は 2.15m でした。全体の枝振り東西 18m、南北約 15m もあり、見事な樹形をしていました。

御座マツの名は、枝の分岐部に人が座れるほどの広さがあるからとも、この松の樹形がどっしりと座っているように見えるからとも言われています。

千本マツ



浅利小跡地に立つ特別養護老人ホームの東、浅利川を挟んだ尾根の南西向き斜面中腹に広がるアカマツ林の端に、根元近くで幹をホウキ状に分かれて伸ばし、樹冠を傘状に広げて立っています。

樹高約 13m、根廻り 2.80m、高地上 0.5m の幹囲は 2.22m で、その上で七支幹に分岐し、さらに上で二十数本に分れて東西約 10.50m、南北約 15.50m に枝を張り、「千本松」の名にふさわしい美形を成しています。

樹種はウツクシマツといい、県下でも珍しい種類であるとともにかなりの巨木であるため、学術的価値が高いとされています。

強瀬が瀧

『国志』【山川部】の浅利川の説明文中に、「(中村川と浅利川の合流点)より八町許にして破岩と云瀑布あり。高壹丈餘こあせが瀧と云。此瀧二段あり。一段は壹丈五尺許なり」との記述が見られることから、江戸時代より見事な瀧としてこの地域では知られていたようです。(1町=60間≒109m、1丈=10尺、1尺≒30cm)

両岸は切り立った崖になっているために川に下りて近寄ることができません。また、両岸からたくさんの木が川に向って枝を張っているために上からのぞき見することもできません。橋の上から滝口を見ることが、音を楽しむことしかできないのが残念です。

中樹山浄照寺



浄土真宗本願寺派(西本願寺)で、本尊は阿弥陀如来です。『国志』には、建治元(1275)年に親鸞聖人の直弟子で関東六老僧の一人といわれた了海上人が「遅能戸の山中中村と云地に入り盛んに念仏の法流を唱ふ遂に一字を建立して浄照寺と号す」とあります。また、現在地の遅能戸へ寛保3(1743)年に移転したともありますが、その経緯については触れられていません。本尊として二つの阿弥陀如来が挙げられ、それぞれ「長一尺九寸四分相伝ふ運慶の作と」、「長一尺三寸五分行基の作と云」とあります。

本堂下陣上段の欄間は左甚五郎の作と言われ、境内には触れると長寿になる「夫婦亀石」があります。

また、遅能戸の語源ともなる鬼伝説の鬼を、桃太郎に追われて逃げてきた岩殿山の鬼として、「甲州道中桃太郎伝説御朱印巡り」の6番札所として御朱印を受け付けています。

なお、浄照寺HPには、「鬼の首」が訛って「おにのと」と、さらに「おそのうと」となり、「鬼が逃げきた際に、戸を閉めるのが遅かったからこのような字を当てる」とあります。

宮澤神社



祭神は木花咲耶姫命(このはなさくやひめのみこと)。古くから子安神社・子育明神と崇められ、市外からも安産、子宝を祈願するたくさんの方がお参りに訪れています。鳥居には「子安宮澤神社」の扁額が掲げられています。

創建のいわれは不明ですが、地区名の遅能戸「おそのと」は宝物である鬼の首(頭)「おにのとう」に由来すると伝えられていることから、盗賊を鬼と呼んでいた平安時代頃に氏神として祀られたと考えられています。また、『大菩薩連嶺』(岩科小一郎 1959)には、浅利式部太郎義知の鬼退治の後日譚として、めぐりめぐって鬼の親分の首が祀られることになった経緯と、子宝・安産の御神徳の起こりについて書かれています。

拝殿の左には、「子育てのスギ」といわれている杉の合体木があり、傍らの説明板によると、妊婦がこの神社にお参りして、この神木の杉皮を剥いて、晒布に包み腹に巻けば、安産疑いなしと信じられています。

おまけ(浅利の地名「浅利式部鬼退治」より)

- ①鬼の住んでいた**鬼窟山**(おにくぼやま)
- ②浅利式部が矢を射立てた**矢向來**(やごうら)
- ③鬼が矢を避けた**シノギ**
- ④飛んで行った鬼の首が揺らいでいた**ユルギ**
- ⑤鬼を泊めた鬼宿(**ウンニヤード**)
- ⑥鬼の手下が葛籠を捨てた**トズラ峠**
- ⑦一夜長者が葛籠を捨てた**横バリ沢**(「厄払い」の訛りとする)
- ⑧鬼の頭を祀った**遅能戸**(鬼の頭→オニノトウ→オノト)

※岩科小一郎、「浅利式部鬼退治」、『大菩薩連嶺』、明文堂、1959、p.197-199 ⇒大月市立図書館所蔵